

クレオールをめぐる連続シンポジウム

今井 勉

いわゆる「フランス文学」という安定した枠組が崩れつつあるのではないか。文献研究における専門性はもちろん重要だが、自己を対象化する外部の視点を持つこともまた同様に重要ではないか。そんな問題意識から、近年様々な文化研究の分野で注目されている「クレオール」と呼ばれているものをめぐって、まず 2003 年 11 月 21 日、一橋大学の恒川邦夫氏、東北大学非常勤講師の正田靖子氏、カリブ史研究者のガブリエル・アンチオブ氏による東北大学文学部でのシンポジウムが、続いて翌 22 日、恒川氏、アンチオブ氏に明治大学の管啓次郎氏を加え、山形大学人文学部での日本フランス語フランス文学会東北支部大会特別シンポジウムが開催された。企画に携わり、司会を承った立場から、この場をお借りして、簡単なお報告をさせていただきたい。

* 第一日「クレオールな夜—文学・政治・歴史の結節点を読む」

まず、恒川氏が「コロニアルからポストコロニアルへ、文学と政治の接点」という小題で、エメ・セゼールとレオポルド・サンゴールの二人を軸に、ネグリチュード運動の時代からポストコロニアル時代に至る政治と文学の密接な関わりを総括的に述べ、恒川氏自身がサンゴール詩集を訳すにあたって経験されたサンゴールとの実際の交渉など興味深いエピソードも紹介された。続いて、正田氏が「スイス・ロマンド文学の確立とその後」という小題で、スイスのフランス語表現文学（ロマンド文学）における女性作家の文体と政治参加の文学について、それぞれ、代表的な作家（アリス・リヴァおよびイヴェット・ズラッゲン）の作品を紹介。特に歴史の読み直しを求める後者の分析に重点を置き、20 世紀の政治の流れの影響を受けざるをえなかった作家たちの創作状況が紹介された。最後に、アンチオブ氏がマルチニック出身の歴史家という立場から、「クレオール」という言葉の定義をめぐって問題提起を行った。言語学的な定義から始まり、現代の文化的な定義まで、さまざまな辞書の定義に基づく説明がなされ、クレオール語による文学といわゆるクレオール文学との差異についての注意の必要性が述べられた。この後、自由な討論となった。恒川氏は、優劣関係にある二言語使用（ダイグロシア）状況はルサンチマンに満ちた世界であり、能力発揮のシステムと結びついた大言語以外の小言語は抑圧されるという構造が、言葉にまつわる様々な緊張・衝突を生み、そうした点への感性がクレオール研究において極めて重要であることを指摘。これと関連して、正田氏が、イタリア系移民の多いスイスにおける言語の多重性と混交性（イブリディテ）について、ダニエル・マジュッツの作品『112 号室』を例に挙げ、作家自らが内包する言葉のテンションをいかに文学作品へと表現するか、そのあり方に関する分析がなされた。また、アンチオブ氏は、かつてグアドループのさとうきび畑に 300 人以上の日本人入植者がいた事実を紹介し、カリブ海が決して日本から遠い存在ではないこと、また、他者の探求を通して自分自身の発見に至る

という意味で、カリブ研究は若い日本人学生諸君にとっても有意義であることが説かれた。会場との活発な質疑応答の中から、ひとつだけ、文学研究のアプローチに関する応答を紹介しておきたい。クレオール研究は歴史的・政治的研究なのか、それとも、純粋美学的研究なのかという問いに対して、恒川氏は、その対比は常に残るが、面白さの質をいかに表現するかは個人の感性と責任によるものだ、ときっぱり応答。正田氏は、権威の外に出る見方、逆方向に回ってみる見方の重要性を指摘し、一個の切り口ですべてを切る態度は作品を殺すことが力強く述べられた。この他、クレオールという言葉の定義をめぐるさらに慎重なやりとりが行われるなど、言葉という核心問題に一気に迫る充実した会となった。

*** 第二日「仏文学から世界の仏語表現文学へ―「クレオール」をキーワードに」**（於山形大学人文学部）

まず、恒川氏が、60年代の旧植民地の独立ラッシュの動きと重なった自身の最初の留学経験に触れ、西欧を模倣する我とアフリカ詩人に共感する我との間の亀裂の感覚から、ヴァレリーを読みつつ同時にサンゴールやセゼールの作品にひかれていく関心の経緯を紹介。そして、30年代のネグリチュード運動から、80年代末のシャモワゾー、コンフィアンらによる『クレオール性礼賛』に至る、仏語圏ポストコロニアル文学の軌跡を大局的に描出し、シンポジウム全体の基調報告を行った。続いて、アンチオブ氏が、「クレオール」および「クレオリテ」という言葉の定義をめぐる、その曖昧さの孕む諸問題を指摘。植民地主義の支配言語であるフランス語に対する劣等言語とみなされてきたクレオール語とそれに基づく文化体系への正しい理解が必要なこと、マルチニックのアンデンティティの感覚はたとえば沖縄やアイヌのそれと通じるものがあり、抑圧されたものたちの状況をよく知った上で「クレオール」や「クレオリテ」という言葉を用いる必要のあることが述べられた。最後に、管氏が、ジョイスとフォークナーへの関心および言語学者・西江雅之による薫陶がカリブ海文学への関心の動機となり、さらに、異なった言語 *langues* で書いても同じ言語的態度 *langage* を有する共通の「言語意識」への関心から、より広く、アメリカ南西部のスペイン語文学を含む広域クレオール文学への興味が育ってきた流れを紹介。その上で、クレオログラフィー（クレオール語の文字領域）の研究を手がかりにしてクレオロフォニー（クレオール語の音声領域）に迫る見通しと、「翻訳」という操作の持つ「輝き」が、自身の豊かな経験に基づいて述べられた。この他、補足として、越境せざるを得ないカリブ海研究の多言語的アプローチの必要性（恒川）やカルチュラルスタディーズ以降増えた「正しさの戦い」を基準とする研究アプローチは根本的に文学と相容れないこと（管）などが指摘された。全体として、問題提起に満ちたシンポジウムとなり、また、「言葉」への感受性の重要性が再認識された機会として有意義であった。

二日間を通して、パネリスト四氏の力強く濃密な語りの質は、従来の国民文学の枠を超えた視点から、仏文という名の蛸壺に揺さぶりをかけるに十分な効果があったように思われる。この場をお借りして四氏に重ねて厚く感謝申し上げる。

（東北大学大学院文学研究科助教授）